

傷刃の田代千語

特43

17



091433-001-4

特43-17

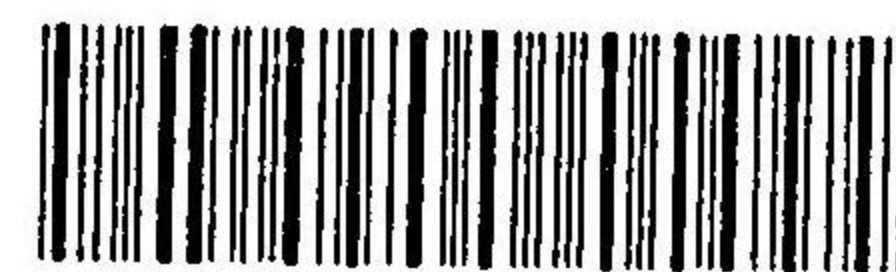
昔語千代田刃傷

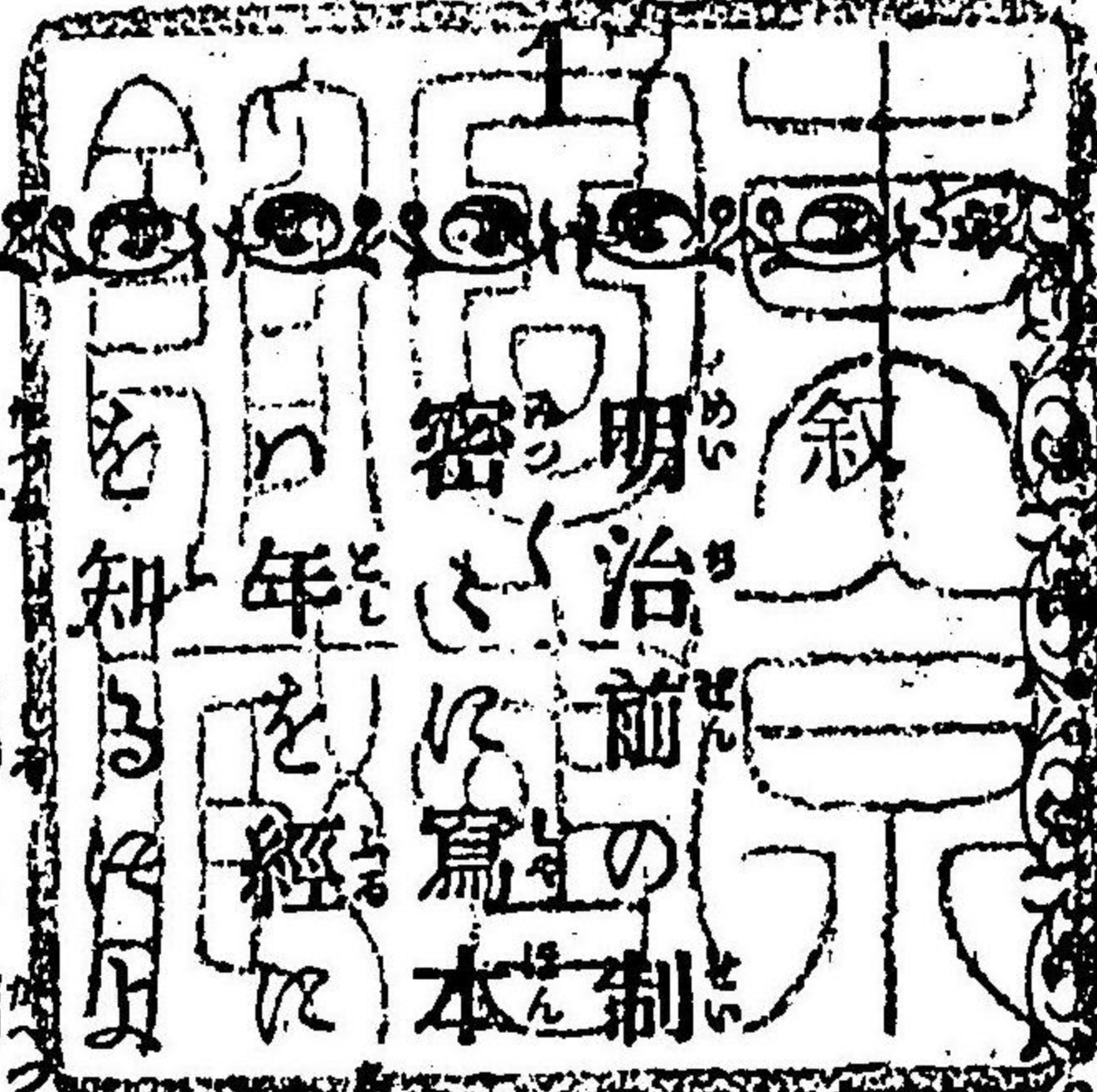
松亭 鶴仙/編

前編

M16

DBN-2344

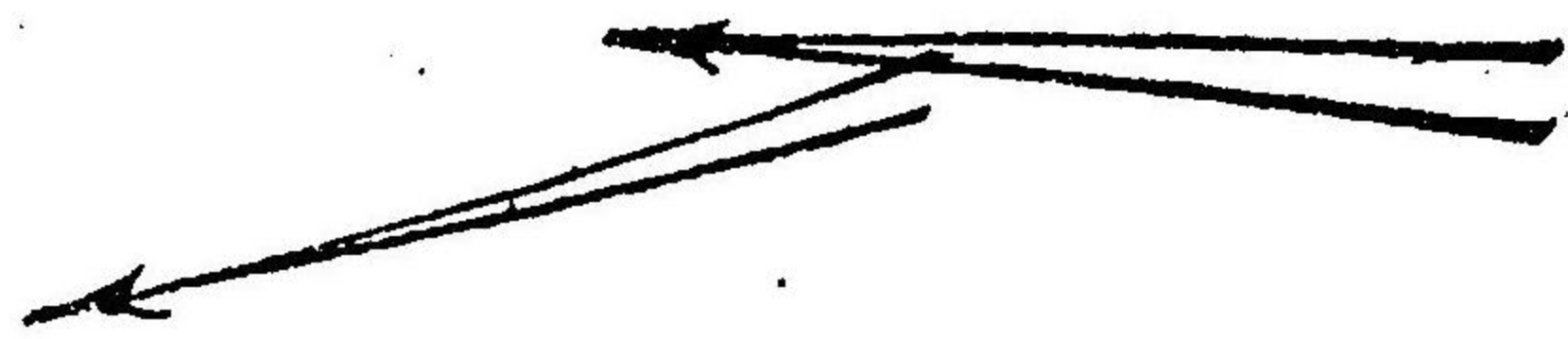
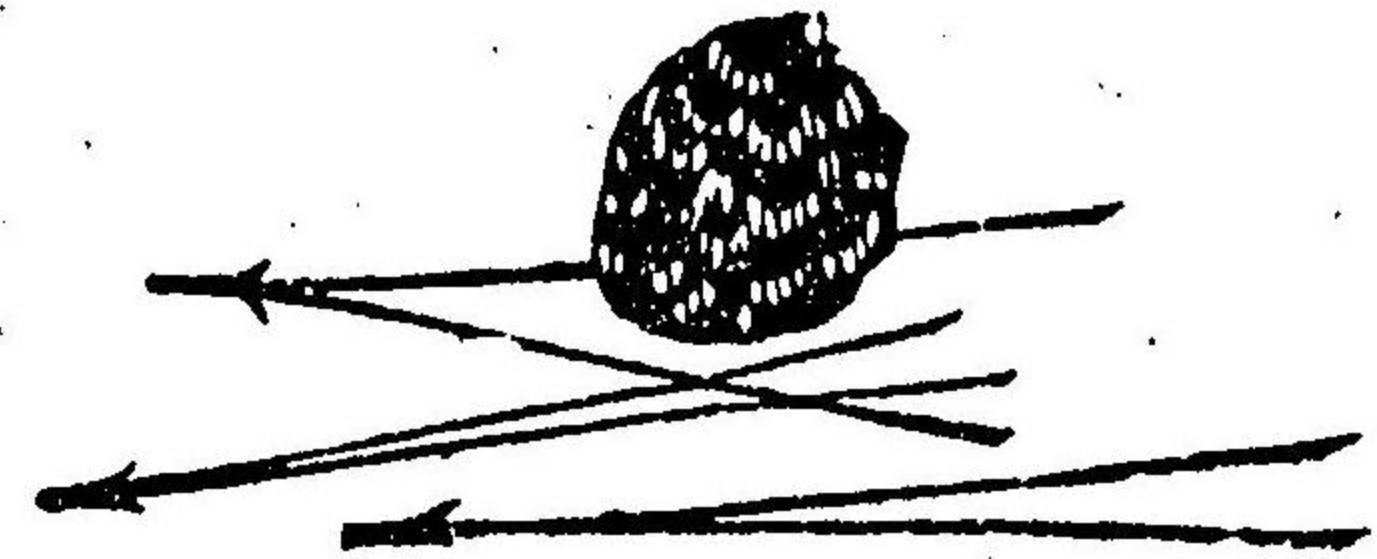




叙 明治前の制として當時の事を書き許さき因て是を
 密に寫本と做が故に其物杜撰なり又口碑に残る
 の年を経た隨ひ纒に其名を傳ふる而已なれば全さ
 を知るに由しなむ茲に於て今諸新聞に古き驛動を
 温て記し却て看客をして其新きを知らむ就中外
 記五人切の如き此頃開花新聞に掲げ世に來歴を詳
 かにと拍手喝采の聲を得るも其儘置ハ再度跡を絶
 んかと惜まるれば別に此一小冊子を編んで永く後
 世に止んとせらる元來の老婆主義かりか

古自萬樓齋誌

昔話
 手代
 田の
 刃傷
 松江堂





間部圖書

神尾五郎



裝太夫

松平外記

昔千代田乃傷前編

東京 松亭鶴仙編

第一回

徳川十一代征夷大將軍家齊公の柳營列系の中に就て福址開け徳運熾なる公なりけり世子家慶公未だ從二位權大納言兼右近衛大將にて在しける文政元年の頃とかよ國內の民卿仁徳の風に靡き濱邊の砂礫博愛の氷に沾ふ盛時の中にも不祥あり开が顛末を尋ぬるに其先世良田氏より出豫州松山の城主久松隱岐守が門派にして攝州尼ヶ崎の城主松平遠江守の分家松平頼母といへるの家祿千石を領し世々御小納戸役を勤めて牛込築地に邸を持ち有福といふにのあらねども貧しからぬ者なりけり頼母と妻二葉が中に外配(十八年)花乃(十六年)といへる二子ありて外記に文武の術を屬まし花乃に裁縫香茶糸竹の道を習せつ孰れ劣らぬ兄妹が出世を娛しむ親心子も孝養を怠らで睦み合たる情態の傍の見る目も羨まし別て花乃は沈魚落雁開月羞花といふへ程の美女にして一とび笑ハ城を傾け再び笑ハ國を傾く李延年が妹君にもおさく劣らぬ佳人とて縁を求め來る者多きが花乃の未だ幼き頃より同じ

松平諒吉へ遣はす約にて結號をしたる處から斷り居しに牛込五十騎町に住居して西丸御書院番の二老たる本多一角の斯とも知ねバ日頃よりして花乃を慕ひ早晚思ひを遂バやと折を謀れと固より松平とい入魂あらねバ近づく序もあがりしが斯て思ひ析ぬべし誰にの之を頼まんと同僚神尾五郎三郎に我臂中を打明せば神尾思はずち笑ひて貴殿に似合ぬ其の心痛不肖なれども拙者が媒妁今も首尾よき返事を申さん金十兩を包まれよと安受合も朋友の厚き情と一角の請がまに金包を遞與ハ神尾の懷中して然らば是より參るべし若し成就せば豫て所望の頼國光をお譲めされイザ參らんと立出て築地の邸を音訪たるが頼母ハ神尾の來りしと聞娘の事にて無のど煩しけれと是非あく對面あせバ察しの如く音物をもて花乃の縁談を言入たればその音物を手すだも觸そ花乃の結號ある身なり本多氏へ遣し難し疾歸り候へとて奥の方へ入たるに立端を失ひ躊躇居たるが花乃の侍女走り出て這ハ嬢様の御心よて本多様への贈送物憚りながら神尾様御持歸りを願ひますと遞與包のうち點附やをら懷中に押入て花乃のの汝より宜しく傳へ呉よと言つゝ玄關先に立出れば若黨梅八袂を扣け只今奥の思召しとお心付を頂きました何分宜く御挨拶をと言に神尾の見送に一禮

述て立出しが頼母の詞の暴々しきさへ合點の往ぬも奥方や花乃どのが優しき舉動如可なる
 情由が定かならぬと察する處一角が疾より花乃と契り居るを知ぬ親父の無一刻大方其處等
 が落であらうと五十騎町へ立戻り本多に慥と告げれば一角不審の眉を蹙せ件の包を押開け
 中より出る短冊に走り書せる一首の歌「さうがにのいとも敢果なし木枯よ思ひあかけそ
 ぼらぬ垣ねに」一學鷹々打詠じて扱こそ花乃の結號の夫も節を立貫て我に思ひを懸なよと
 戒めたりし此の詠歌夫どの知す神尾氏も足勞懸し我が誤り面目次第もなき事ながら恥し
 められし此歌を見るに付ても猶増る思ひを遂す置べきの五郎三郎どの御貴殿も思慮を廻
 下さるべしと思ひ入るる情態に神尾の口惜く齒嚙をなし頼母の無禮を見習て花乃までが
 詠歌の嘲弄渠君側に仕ふるを鼻にかけて我々を屑のすとも思ひぬ舉動憎ても尙餘りあり
 夫にて思ひ合するの筆頭安西伊賀介どの當春上野の花見の折櫻ヶ岡にて一個の美人を見初
 られしを問部圖書どの其侍女を招止て孰れの御寮人なるぞと問ハ座光寺支番どの息女八
 重子と答へしゆる座光寺ならハ傳手もありとて安西氏に歸宅早々人を以て申し入しに其
 日の豫縁約束の松平外記と他所ながら見合れ爲に行たるが何方も心に適ひしとて御覽の如

く結納も取交せたる事なれば今と成てハ六日の暮滿一日早くハ何とでも御相談を致すべき
 にと辭を解たる口上に安西氏も委細を聞々失望大方ならずして外記とかいふ頼母が一子
 さても果報な男だと拙者にお話めされたが御書院番の我々を兎角蔑とる渠等が舉動女早魁
 がするでいなし渠奴們的如き汚いしき者の小兒お執心なされいでも未だ世間ハ美人もほ
 らうコレ本多氏一學どの未だ其の歌を詠めてござるか何した者だと喧しき詞を耳にも入す
 して件の短冊打詠め歌といひ手蹟といひ万能達した彼の花乃むざく他に手折すといひ言
 つゝ此方を見返りて神尾氏一献進ぜん奥へとばかり打連て一間の方へ入ふけり私怨を以て
 公務を妨ぐるハ今の時代になき事ながら柳營盛んの頃ハ此の弊甚だしく新參の者の古參
 の者の奴僕の如き状態にて同ぞく君に仕る身も斯の如く差異ありしハ歎くべき事にこそ斯
 て松平頼母ハ一子外記を教ゆると一日も怠りなかりしかハ外記ハ文武の奥儀を極めたりし
 かハ十八歳の青年にハ最珍しとて早も柳營に聞之部屋住ながら切米三百俵を賜りて西丸御
 書院三番組に登用の身となりよけり抑も此の兩御番と稱ふるハ寛永年間より始りて五万石
 以上の大名を番頭とあし御書院番御小性組を兩番といひ各々十組の部類ありて一組の員

五十八人各々五百騎の人員あり此役向の御帳掛一組六人御供押八人進物御番四十八廻方御番等あり是等の人を撰み出すに文武上達の聞えある子息を多く採用しとたが外記の其才秀るるゆゑ西丸御書院番に組入れ虎之間勤仕の列入りたり此の筆頭ハ則ち安西伊賀介に二老ハ本多一學三老ハ神尾五郎三郎次ハ間部圖書なるが遺恨のある人ども知ねバ外記の父が措揮に任せ筆頭よりして順々に同僚中を頼み歩行夫々音物を送りし後始じめて登城したりしと神尾の夫と見るより貴殿が松平外記の才智衆に勝れ文武上達の趣ひきの辱さよ承たまひりたれと御目に懸るハ只今初じめて拙者如きの無骨の性何んも心得る者なれば貴殿の腕に仰慕たいが肩を揉で下ださるまいのイヤサ萬能達した御貴殿ゆる按摩も定めて御上手ならん御手前拜見致しとい言傍らより間部圖書コレ松平氏如何召れた神尾氏を揉だとして腕が減も致すまいと勸めに否みも成かねて外記の静かに後へ廻り神尾が肩を揉和ぐれば圖書の手早く筆を操り外記の衣服の紋を塗抹素知ぬ顔して扣へ居るに本多一學進寄り按摩の御手極感心致した併し時刻も時刻なれば御行厨をお開きなされ貴殿の御茶の此處にありと出とを外記の押戴き御配慮の段け忝なし各位もお開きなされと會釋

あして行厨の蓋を開れば暈の甚度中に飯の有ずして見るも鬱悒馬糞あれば是の驚く顔を見て一學圖書の顔見合せ外記の夫の何でござる松平とも言れる方が米の喰すに乞食だお拾ひぬ馬糞が御行厨か夫での御茶を進らせんと圖書の手早く土瓶をどり人の前をも隠らず已が尿を中へ入是で茶漬が宜くござらう奇体な人も見る者だト飽まで嘲弄せらるれども勤大事と思ふより其日の番を勤遂せ恨を呑で下城する心の裏や如何ならん推量るさへ憐れなり斯て外記の初登城にて痛く恥辱を受されと膽力衆に勝れし者として敢て怒れる氣色見せねど供も立る若黨松藏下僕要助の兩人の主人の心を推量て無念の唾を呑み腕を擦れり外記の聊か憂ふる色なく父にも母にも恙なく勤め遂せて歸宅の由を告居間へ籠れど心の鬱を拂ひかね物の本など披き居たるが我にもゆらで横手を拍ち獨り頻りに點頭て松藏のみを密かお招き其心を得さすれば松藏首を打振て若旦那の御了簡甚だ以て宜からず日頃の文學を現して渠等を一言半句の下に言伏るか夫にても肯ざる時の武術を以て以後をお懲しあされなら丈の知たる安西本多必ず以後を謹ませせうといふを打消しコリヤ松藏其方の公儀の事を知ねバ匹夫の勇を憑むで有うが凡そ小人を和ぐるにハ利を咬のするの外あし夫故安西本

多を始め同僚中を招いた上引物として十兩づゝ又小圓に充分酒を進て五百正落なく取
し心を慰めん面して尙も増長なまば其時思の儘に懲まり遣ん我が存念を必ず父上又洩す
なよ心得たるものと説諭せば主命是非なく松藏の領承なして罷出たり外記の響應の準備を整
へ浮世小路の百川へ同僚相番の者輩を招きて酒宴を催しつ勤役の義を頼み入しに始めの程
の配膳の上添たる山吹の
色に心を奪はれたる本多も
更に弄嘲せず御配慮の段痛
み入ると禮を崩さで慇懃不
交す玉盃順又廻り逆に戻り
て喜びの色を表面に顯れし
が安西伊賀介の傍なる本多
一學に目配せして挨拶をな
し立歸れば夫に隨ふ二三の



者も辭儀を正して歸せし
と神尾間部の兩人の飽やで
酒を食して醉が言する無禮
雜言松平氏今晚の馬糞の
殺を如何なされた得了親御
がお傍丈に小身者の我々を
驚のした此の御馳走兎ても
の事に萬壽の其一つある三
絃を拙者輩にお聞せ下され



曲て圖書がお願申すといふに傍ら五郎三郎昨日の貴殿が按摩にて肩が和ぎ今夜のまた意
外の珍味で満腹致した此上貴殿の三絃で耳の掃除を致したら拙者の命が延るといふ者不肖
あれども五郎三郎是此の通り手を突て歎願申すも曲らぬ舌次に聞居る松藏の堪へ兼て立出
るを外記の目をもて押し止め猶も辭退を爲そうちに兩個の松藏の勢に驚きたるが酒氣お交ら

し是ハ大層酩酊致した間部氏お暇致さうと打連立て歸り行く道い寒しき丸の内彼方より來る挑灯の豫て覺えの座光寺の使と見るより間部圖書早くも下僕に吩咐て己れハ屏所へ身を忍び容子如何と待居たるに下僕ハ息哽立歸りて仰の通り計ひましと聞ハ只今松平頼母様へ參つゝ歸りて乃ち五月六日の夜が本祝言の腰入か浮迦渠奴が喋りましたと言を聞取り莞爾と笑み是で日頃の。エ、急げと詞の消せと消のぬる意地ハ曲りし角生る牛込指て歸りたり座光寺玄蕃が娘八重子の外記と結就をなしたる翌日安西伊賀介より所望を受しが既に縁談纏まりたる後の事として休よく斷り只管婚儀の準備を急ぎぬ固是の八重子の才學勝れ紫清の智をさへ備へしとの風評高き者なれば伊賀介が奸佞なる若し此事を遺恨に思ひて由なき祟を爲んかど肚裏にて患るにぞ婚姻の日を延さんと屢々父に乞されども外記ハ得難き聲なるに今更嫌ふハ甚麽ぞや己が些の色香を憑と高き深山の花を手折深き淵瀬の魚を拿んと相應のらぬ望を懸け末ハ卒塔婆の嘆きを求めし小野小町が轍を踏そと敢て肯了べくもあらねハ八重子の再び返さん言なく即ち五月六日の夜大師の禮を行ハんと身も重ねたる白衣の心ハ素き新嫁の威儀ハ正しき紙打の乗物急がせ往先ハ水道町の曲り角伴人俄に騒ぎ立叫び

もあへず逃散しに入重子の打騒ぐ胸を靜めて手近なる守護刀ハ符を脱し身構なしたる折しも羽れ駕の戸矢庭より引開て八重子の手を把引出す二個の武士ハ覆面して面ハ睨と解ねと夜目にも著き氷の白刃後ハ匿し側に寄り介奴ハ是で残らず拂つて此方へ來いと引立ちらる八重子の怖さも打忘れ何人なれば夜中の狼席婦女と思ひ侮つて今ハ後悔をやるなと把れし腕を振拂ひ守護刀の鞘拂つて身構あしつゝ聲を上可弱き女の細腕も節を籠し妾が尖刃よしや力の足らずして無慙く討きて死するとも汝等如きに淫樂やれうぞと覺期極し状態ハ現に珍しき女夫なり斯と見るより曲者二人エ、洒落臭い女の廣言夫と言つゝ立懸る折しも後に人ありて物をも言す兩人を打懲したる勢ひの不意ハ驚きしか其儘兩個ハ逃去たり八重子の我身の危難を救ひ呉たる其人を誰ぞと見れば松平の下僕要助などける故水母の骨を得たる心地しオ、要助かと詞を懸るに要助大地へ額突て八重子様何處も御怪我ハ我在ませんか豫てお定なされたる時刻が遅く成ますので親御様の御心配にて下郎めに見て參れと仰やり付で御在ますから急いで參る此道筋計らぬ御難を見ると均しく曲者共ハ追散せと下郎一人でお供をして歸る譯も參りませぬが鳥渡貴女のお邸まで。夫にハ及ばぬ供人も追々來るで有う

から暮時此處にて休息せんと駕籠を寄添折から父の玄蕃娘が上を案じて此處へ來懸りし此
 体を見て打驚き开も何人がと尋ぬるを八重子打消天故妾が婚姻の日延を願申しされど聞
 入なき多々の一轍夫を兎や斯申すのでい御在ませんが今直に良家へ行ハ良夫の難儀夫かと
 言て我家の門を出ながら歸りおバ良夫を棄る道理ゆゑ豫々入魂の松平諒吉迄のハ良夫の
 女弟再縁の日の定るまで何ぞ彼方へお預を頼む詞ハ婦女の正道曲てい言ぬ父玄蕃も其意
 に任せて常磐なと同じ翠の松平諒吉方へと送り行きぬ

第二回

婚儀の途中に埋伏して八重子を奪いんと巧しの間部圖書に神尾なり渠安西伊賀介が八重子
 の事を思ひ煩ひ外記の果報を羨むを見て自ら之に阿るより斯る事を巧しなれを要助の爲
 に妨げられ却て其の身を打懲されしに恨いといと勝れども明ていふべき事さらば其儘に
 して黙言居たるが八重子の其夜の災禍にて良夫の上を打案じ松平への往すして他家に寓居
 を爲すよしの捷くも間部神尾聞えしかハ少しく心を休めけり復表松平外記ハ當春始めて召
 出され御書院番を勤め居たるも精勤の旨上聞に達し僅の半年の月日を経て文政二年六月廿

日御供押の役を蒙る外記ハ君恩の厚さに感じ益々忠勤を勵まやバと夙夜精實に勤め居れど
 も安西本多自餘の者ハ只さへ恨のあるものを新參よりして大切の役目を蒙る妬ましさに自
 ら手をこそ下ししせね神尾間部們に其意を得させ恥辱を與ふる屢々あるも外記ハ聊か必
 止す爲すに任せて争いぬハ奸佞邪智の安西も今ハ詮術あらざかや此の手彼の手と品を換妨
 碍をのみ爲し居り時しも文月も纔となり廿五日の頃なりしか將軍駒場野に御成の旨漏
 なく執達せられけるが兩御番ハ當日の拍木役を譽とせるお誰が此役に方るにやと獲物な
 らねど中原に相逐心地ぞせられたる开も駒場野の御成といふハ多く鶴野の之にして此日兩
 御番の役向ハ一組より二十五騎づ、騎馬勢子を仰付けられ番組ハ白の采組頭ハ淺黄の采も
 て各々組下の下知をあし勢子の組印の陣羽織にて馬上に御鳥見印の扇を上げるを目的に采
 を揮り組下之を取圍めハ中に拍子木番ありて相圖の拍子木を打廻る是にて將軍出御あり
 御側の衆若年寄御供たり鷹匠頭御鷹と合せれば四組の勢子争つて之を捕ふ其の態宛然戰
 場の如し然るに此處の拍子木番ハ未だ誰ども定らざる早くも八月の上旬となりぬ今ハ昔の
 御成行列殊に十一代家齊公ハ華美れ君に在ましければ御供廻も綺麗やのにて見る者眼の

瞑くらむまでなり青山あきやま澁谷しぶやを行ゆ離はなれて渺へら茫ぼうたる駒場こまばの原はらなる設まうけの御坐ごまお就給つきたまへり番頭ばんとう御膳ごぜんに進すすみ出いで今日こんにちの拍子木ひょうしぎ役未やくいだ御沙汰ごさた之これあさに付離つきたれにも命いのちじ候まうらのす上かみに御思召ごしめしバし候まうらふてや承うけたまひりたう存ぞんじまつると恐おそるく言上ごんじやうとそれバ家齊いへなり公こうの莞爾くわんじと笑あと拍子木ひょうしぎ番ばんの義ぎの余よか目鏡めがねよて松平まつだいら外記げきにやし付つべし是これへ呼よとぞ仰たはせらる番頭ばんとう御膳ごぜんを畏おそみ次つぎへ立たんとする袂たもとを安西あんさい狼狽らうたい押し止おしどめ御膳ごぜんに候まうらへとも集かれ
 の新番にいばんの若者わかしよかれバ古参こさんの者ものの思おもくも如何いか此儀このぎの何卒なにぞ異人こまびとにと言いを御ごけ上意じやういなり今更いまさら他人たにんに命めいぜらるべき扣ひへ召めされとて平供留ひらごまどまりに休やすみ居ゐたる外記げきを召めけれバ外記げきの俄にげかの御召ごめしに依より何事なにごとあるかど御前ごぜんに進すすめバ家齊いへなり公こう



見みそなりし汝なんぢが精勤せいじんの趣おもむきの番頭ばんとうより傳聞つたへきも余まも満足まんぞくに思おもふぞよ就つて今日こんにちの拍子木ひょうしぎ役やくを汝なんぢお申し付つけるあり古老ころうの者ものの指南しゆんを受け粗畧そりやくなきやう勤つとめよと宣のたまふ下したより安西あんさい伊賀いが介け其そのの御指南ごしゆんの拙者せつしやが致いたさん新参にいさんの御貴殿ごきでんに定さだめて古實こじつの御存ごぞんじある
 まい此處こゝへ來きませと先さきお立たつに外記げきの後あとより附從つづひ幕まくの外邊ぐわいへんへ廻まり出いで御傳授ごでんじゆお頼たのみしませると平臥へいふしす外記げきを警おしりて見遣みやり松平まつだいら氏うぢ御貴殿ごきでんの緒いとも果報くわほうある生れ付うまえ御親父ごしんぢ頼母たのごのが御傍ごそばゆゑ僅わずかか半年はんとしの御奉公ごほうこうで拍子木ひょうしぎ役やくとい伊賀いが介けも幾いかに感服かんぷく仕つかつた殊ことに是これまで例たとひなき御聲ごこゑ懸かりの其御役目そのごやくめ随分ずいぶん大切たいせつにお勤つとめ召めされと詞ことばに判持はんぢち安西あんさいが宿意しゆくいの戀こひの遺恨ゐこんをも晴はらしと思おもふ



ぞと神ならぬ身の夢にも知ず外記の首を地に擦付け身も餘たる此大役貴殿が御指南の餘徳を以て勤め遂せし身の面目之に過んど只管に頼り伊賀の術を立て先拍子木の拍方いと云つ、片手に取直し外記を以て最初が斯様でござると肩間へ發失と撲付け外記の其手を腕と取り安西氏にの拙者めと。オ、打擲するのも後日の爲古參の者を聞いて増長ある以後の戒め斯々々と續け打撃れて外記の口惜さに我を忘れて刀の柄手を懸ながら詰寄り伊賀介の聲荒らげ御前問近れば此幕外無禮召さるな松平と警められて心付ら見上る額へ拍子木を磔と投付莞爾と笑み帷幕の内へと旋入る後を眺めて衝立上れば遙の之を見て居たる若紫松藏走り來て御前額の其お怪我いと云れて外記の氣を轉じ不馴の業ゆゑ過ち致した松藏早く元結を急ぎ髪を梳づらせ仕度を整ふ折りしも恐れ合圖とよもに鳥見の役人はや立出るに後れじと外記の手早く鉢巻に疵を隠して出行たり暴戻なるのな安西伊賀己が私心を提携んで役儀の妨碍を爲んとせり堪忍なるのな松平外記奸者の横恣に窘められるれ飽まで精忠を抽で能く凌辱を堪忍ぶ人性の善惡斯まで懸隔するとの甚麼ぞや閑話 休憩爰に忠僕要介の八重子が危難を助けしより益々安西本多們が主人お恨む緯の基を種々に踪索なし

りしが漸く安西の八重子に懸想なしたる事本多の花乃に變幕して所望しされど先約ありて断られざるが根ざしなる旨詳に探り得たる上伴待所にて噂を聞に非番の節に吉原の半藏松葉へ誘ひ出し外記に恥辱を與へんと神尾間部が計ひにて内々準備をなとよしき、スハ一大事と心を碎き右さ左さ考へしが不圖三浦屋は高尾太夫が石井常右衛門を助けたる昔語を思ひ出し今吉原の全盛と人の話に聞居たる半藏松葉の装に委細を語りて頼さんものと忠義一轍横道に迷ひぬ奴が只一人まだ踏も見ぬ吉原の京町一丁目の松葉屋が店より小腰を打掛て装どのに會してと頼む心は底知ぬ樓下門の高笑ひ何處の邸の折助か知ねへけれど全盛の装華魁に會うどの押し強い奴さん一昨日來なせへ會して遣うと異口同音に嘲弄を要介猶も詞を和げ夫の成程御道理奴風情が華魁に會して吳とい不疑なれ是に解のある事ゆへ永居の致さぬ少しの間向を會して下さいますと額を土に摺付けてまた他事もさく頼み入る詞に誠の現るゝを見ての不解にも遠ざれず樓下門も纒に承諾 装太夫に斯と告れば此方へお通しやせとの答ふ要介飛立嬉しさ綺麗びやかある装が座敷に通つて遙かみ退り両手を突て容を改ため下郎事西丸御番松平外記が召使要介といふ仲間無作法者で御在ま

するが今日はへ参りましたのナト折入て貴妓様へ御願やし度事がと言つゝ四邊を見廻し其の仔細の餘の義に非ず私主人外記とすの忠義の外に邪な心のあらぬ者あるを佞人安西本多門が妬んで種々に恥辱を與へ尙も當家へ誘ひ來て恥をかゝせん渠等が巧み因て下郎れお願ひ何ぞ貴妓が其晩の敵妓となり主人を馴染の如く取扱ひ安西本多に恥面をのゝせて遣て下さらば下郎の満足此上なし只管願ふ装どのと信實見ゆる言の葉よ装太夫も成じ入り奴さんの其の忠義を聞いて何で斷られませう宜しうござんを受合ましたと承知の体に要介の天へも上る心地して得了に張と意氣地とで譽を揚る全盛な華魁のまた違つた者だ何よも言ぬ是斯だど兩手を合して伏拜み馳て暇を告勇と進んで歸り行く表題 松平外記の駒場に於て安西に飽まで恥辱を與へられ剩さへ額際を打割れたる鬱忿の五體に徹して忘られねバ此ぞ大事の場所ありと恨を吞で勤め遂せ歸宅の後も鬱々と考ふるより外あきを父の頼母の明々地に夫どの知ぬを先頃より怪事のみ多かれバ外記は血氣を戒めん爲故き事なぞ引來りて只外あから意見をする外記の猶更堪忍の臍を堅めて勤むれば神尾問部の増長して時しも九月の中旬なれば菊見の序に吉原へ廻つて見ばやと勝ふを否みもならず承引て下城

の途に就うちも鬱悵顔の見ゆるのら松藏側より袂を扣へまた今日も御詰所にて何か渠等がやしましたかと案ずる後邊の要介のモシ御前様明日の廊のお供の要介めにと言を遽かに押止め「ア、下郎の口の善悪ない者だを恚て外記の同僚の勸誘に是非なく吉原へ入相待ぬ豈遊び神尾問部が先立ち巢鴨谷中の附りにて菊の廊の香に匂ふ仲之町の淺屋お各個上れば疾よりして安西本多も此に在り座も定されバ豫てより準備きたる酒肴を處狭さまで置並べ遊妓判問も座に待して興を添れバ神尾問部の調子外れの聲を揚げ唄ひつ舞つ打騒げど洗石に安西本多二人の膝をも崩さず笑ひ居たるが外記の其の性優美あれども忠義に凝たる鎖石心浮たる事を好まねバ酒地肉林の樂しみも歌舞音曲の鄭聲も更お心を娛しませず却て叫喚地獄に墜ち阿鼻焦熱に苦しむ如く憂へよ沈むを我からして是も務の義理にこそと氣を取直して在けるが酒宴も既に酩酊過ぎ興漸く盡がてに本多一角膝を進め日も良西に傾きて廊の旭と詠にけん火灯頃にとがゞきの音を聞つゝ青樓に上るも一興なるべしと四方を見廻す其の傍から神尾五郎三郎進み出夫が拙者の望む處我々ども馴染もあれバ松平氏の御初會あら今吉原で全盛の半藏松葉の華魁に馴染のさいの知た事だが一体貴殿の何る女がお好でこ

ざるか承まつて拙者が媒妁仕つらふと多くの人に聞えよと罵る聲を聞付けて茶博士の二階へ來りモシ神尾の殿様へ松平の御前に装ひといふ華魁が人しい間の御馴染ですといふお神尾の嘯出し人も有うに此の野暮の松平氏か装太夫に。虚か誠のお出の上か遊ばせも殿様人の見懸に因ませぬぞへと言返されて一同に顔見合て呆る中も外記の露塵覺えのる事主個又言出され如何成行事やらんと案じながらも只得れの誘ひるまゝ松葉屋に到りて又も酒宴を開くに装太夫の新造禿兒の最馴々しく松平を持待處のら安西の己が目算狂ひしに益々心焦燥バ私かに夫と眼配せするを間部の早くも承知して装太夫が座敷又往き金幾干かを差出し太夫の何と思つて居るか彼の松平の佞奸邪智にて信の薄い碌でなし和女の浮遊松平が辨に騙され實義のある男と思つて居られうかモウ宜加減お思ひ切り今夜の一番満座の中で取をかせせて御遣なせへと辨を巧み又言ひまのを間部が心の可笑さを装太夫の耳にも懸す人の懸路の邪魔する奴の犬も囀れて死ばよほどのいふ百々逸が有んしたが主の夫を知いせんか命までもと言替した彼の外記さんと二人が中へ夫を離間ちや切いせん大いお世話でおつしたと言つて起て出て行く装が後見送りて間部の全く謀計の粗詰ひ

たる武者苦者腹また如何ある事をのする开け且次回を看まへかし

第三回

然ぬだに秋の寒しきものなるに小夜更渡る鐘の音も丑三過て葉隠れに露を布寐の虫の聲木枯とやき風の音も斷猿枯腸の無常を添ふる此處の名に負ふ日本堤不夜城中の管絃も疾く音を絶て久方の空より知ぬ巫山の雲散じて楚臺の雨となる比翼の衾おぼらなくに人目を忍ぶ頬冠り袴の腿だち高く取り刀の目釘を濡しつゝ東西を見廻し掛茶屋の段簀の庇所に身を忍ぶ程もわらせず大門より三枚肩の息急とホイ聲上て擔ぎ來る上にすつくり以前の男駕籠の棒朧かと押へ右手で閃りと抜く白刃の光ととも燈籠を砍て棄たる体狀に昇夫の驚き其の儘に駕籠を打棄逸出すと件の男の目も懸ず駕籠の簾を引上れば中の音に鳴く現せみの藻抜の空駕籠のい掻りて這の疾く風を喰つゝか遺憾ありきと布團に手を當また温まりの去ぬからの遠くの道まじ追おけてな行んとするを後より聲をも懸す斬下を刃の光りお身を交し心得たりと渡り合ひ青眼霞身の秘術を盡し一上一下虚實の手練突ハ開き斬り受け結ぶ時に火花を散し離るる時に砂礫を飛す勇士と勇士が太刀筋の勝り劣りのあらざりしが駕籠

なる人の何思ひけん聲をも懸す無禮の狼籍何奴るれば卑怯にも途中み埋伏したるぞや名乗
 を揚よと呼いれ此方何々打笑ひ勢ひ盡ての咎め立遺恨の基の言すども汝の心に覺え
 わらん斯いふ我の松平外記が譜代の若徒たる松藏なるぞと言下からナ松藏だ卒忍となど
 止るも肯す猶も詰寄り主人の爲よ一命を棄て遺恨を晴さんす我が忠魂を聞ながら逃やうと
 て逃さうかと又斬かくるを受止め松藏貴様の何をする己の聲が解らねへの要介だく。ナ
 ニ要介が今時分逸る心で然いふの道理なれどコレ冗き氣を落付て聞て呉れ貴様も知て居る
 通り今日殿様を吉原へ誘ひ出とどの豫てより聞て居た故先へ廻り装大夫に委細を頼み今夜
 の安西本多等が鼻を開して遣されど執念深い狐野郎途中で若もの事があつていと御前を茶
 屋へ御止し下郎が一人此駕籠で歸つた譯だ松藏さんお前も安心するがいと詞短の己さへ
 細を話せば松藏思はず横手を拍ち一期半期の折助と今まで何よも言なんだが譜代の己さへ
 及ばぬ忠義貴様がなく御前様今宵も多くの人中に耻辱をお受なさうものを然と知す
 倭人輩が乗たる駕籠と目印を附て置たる灯笼を目宛に刃を向しこそ返すくも愚なれ許し
 て吳よ要介と詫るを打消し何がさて年期雇も御普代も同じ邸の御奉公忠義の心は皆な一つ

だ双方も怪我のあかつたのが何より互ひの僥倖お前が來れば百人力少しも早く殿様を
 流石の要介能く言と續て來いと駈出と忠義の同じ一筋道大門さして急ぎ行く二人が心を頼
 母しき却而脱松平外記の松藏要介等が忠義お據て耻辱も受す危難に罹らず無事に歸館なし
 たれども装大夫が義に荒み慾に心を引されぬ所謂泥中君子の風移る意相も感して戀にわ
 らねと禮の爲めに一回往んと思ものから公務に追わらぬ身の心ならずも日を送りて身も憂
 き事の重なりたる文政元年といふ年も二年の曆と改まりて早くも秋の最中となりぬ外記の
 安西本多等が執念祟るを憂ふれども敢て怒を現さねバ今少しく心に倦しか太く凌辱せざ
 るより父頼母の一日も早く八重子を迎へんといへど聊か志願の筋もあれバ今兩三年御猶豫
 ありさし夫に就ては妹花乃も先づ諒吉に娶ひて事御見合を願ふとて更に承引氣色されけ
 ばまだ年壯き身の癖とて斯る事をいふならん今もあれ悟りあは其時直ちに婚姻させんと
 思ひ居られバ強て言す其儘にして過さるとなん單表池之端仲町に白江洗伯といふ茶道
 師り世々御本丸表坊主を勤め浮雲の富も奢侈を極め年の四十路に近ければ性質甚だ色を好
 み又ハ博奕の業に長じて酒色に飽バ類を集め筵も勝負を争そひ居たるが一日安西伊賀介が

西丸御書院番頭たる酒井山城守の館より往き茶の饗應を受たる折圖らず白江と入魂に成り茶道の稽古をなしたしとて親しく白江を訪けるが此の洗伯の豫てより松平への出入をして外記花野にも茶道を教へし者との曾て知ねども一曲あるべき面魄ひに伊賀介の渠が氣を試し見んとて種々に手術を用ひて我方へ畧引入し處から一夜非番の折を量り白江を連れて吉原の半藏松葉へ遊びに行き態と白江を先へ遣り外れ茶屋より装を敵好に出し安西の知ぬ振して通ひつゝ外記の實否を探らせしに固より知ぬ事なれど装太夫の故らに外記の事を口に出さず白江に心のゆり氣なる素振又接待居りしうべ色に惚き洗伯の圓頂を光らせつ伊賀の頼みも打忘れて只装が色香に迷ひ履を通ひ居るうち装太夫の洗伯に身の上話を打明して未だ顔さへも見えず事なき兄ありその兄に會して下されば縦令此身の炊飯の賤し業を爲すども御恩の屹度酬へんといふを白江の香込で彼の是のと會入毎に語り居ると要介が早くも聞付て思ひ合する事ありしか若黨松藏に私語示せば松藏大さに驚いて情の幼稚其折み別れし妹でゆつゝかとい思ひながらも素知ぬ顔して外記より一日の暇を乞ひしが外記の折よく非番の折なれば装が事を思ひ出して今日去年安西等に誘はれたる當日

あるを禮に參らんと思ふ處大儀ながらも彼處まで伴をした後執れへなど往がよほどの主人が詞に松藏大さに歡びて外記が邊後に引添つゝ吉原さしてぞ急ぎける茲にまた半藏松葉の装の源平胡越の種類を撰ばずうき臥繁き枕の端に實の兄に逢んものも只夫れのを心頭み懸け忘ゝ開のあらざりしが不圖白江洗伯が是非とも兄を探し出し逢して遣んどの誓の詞に今日音信のある事か明日の便が知やうのと娛しみ送る晝夜の勤め憂さへ忘るゝ程なりしが一日湊佐の女中が来て松平標が華魁へ延引ながら禮に來たとお忍姿で見えよした此方へお伴致しませうかと言に装驚ろきて失禮ながら此方へと申してお呉なんしといふも心の落付ぬ喜び顔茶屋女のとつかいと歸つて直に松平を伴ひ來る其後より續いて松藏も入來り次の間近く控たり外記の懇勸に両手を突き過日といふもはや一年安西本多に教唆され此處に來し其夜さり満座の中にて恥辱を受ける處を其許の情に因て免れしのみか却て渠等が氣を奪ひ再び事を發さぬ則ち其許が義に勇む心と只管感佩せり直にも御禮に出る筈なれど公務の爲に今日まで延引致した拙者が不覺中に許し下されよと詫る詞の律義さに装のよた答さへ出ぬを外記の押返してさて何をがな御禮にと思つたなれど知るゝ通りの無骨者ゆ

あ笑われるのも如何と思ひ夫故何にも持参せず是の拙者が寸志までに進上致す一品と言つ
彼方を指招けバ其意を待てか松藏が主人の側へ居直るを外記の装の前よ進め是を拙者
が寸志の一品鏡ようつる佛の似た他人か兄弟の故にし話しに邂逅の喜悅を互みに表され
よと言れて驚く装より堪へくし松藏の恐り膝を進ましてお園よ兄の萬吉だ別れてか
らの十五年大層大きく成たなど名乗懸られ今更に装太夫の夢の中に夢を見るてふ心地し
て夫ならお前が兄さんでしよといふも涙に聲曇り膝に其身を打伏てワツとばかり泣出
す兄松藏も涙お咽言んとすれと聲出ぬを漸くにして氣を取直しコノお園泣まいぞやまだ
夫よりも聞たさの我萬吉と稱し頃父上吉田屋喜平様汝の險難の相ありと觀相者が言たれバ
出家得度を爲よとて上野へ送られし時和女の未だ三歳兒なりしが我沙門お入ると雖も
心に浮屠の業を嫌へバ即の坊敢て剃髮させす寺小性に使れし後京都叡山延曆寺へ師の伴を
して往る折圖らず松平頼母様の御普代の建野松藏のに賞ひ取れて養子となり兩親死去
の其の後養父の名前を其儘に松藏と呼び歸府の上元の住居を尋ぬれと絶て往方知れざり
しがシテまた和女何ゆゑに浮河竹への沈みしと父上様や母様の如何なされコノお園泣

すと仔細を話して呉せうだくと問懸られ装太夫の尙更お哀しさ増る涙を拭ひ事長くと
も聞し給へよと道つ身を起し別間に飾りし佛壇の厨子を開きて取出と二個の位牌を前へ
置き此のお位牌こそ御兩親の亡き御靈でございよとが阿兄が上野へ寺入の後間もなく爹さ
んの時疫でお果なされ姉さん一人で店の事を取切つてお出あすつたも是さへ妾が四才の時
終に歸らぬ旅人とお成なされて其後の店も全く人手お渡り妾の伴管武衛夫婦に世話を受
たる十年の時武衛の妾を此里へ賣て苦界の憂勤め生の二親兄上の顔さへ知す生死の別れ
く成果で憑む武衛の腹黒く年端の往ぬを附込での誠己が娘だと親風吹す面憎さも
養ひの恩を思ふゆゑ態と誠の父母かど欺詐言を伴りて承れば益々附上り妾の衣類簪兒まで
己が勝手に活却ひ今日賭博で負て來た明日の社會の交際だと妾を裸體にした上で到々妾
に無理難題勤めをせねバ殺とぞと光る物を閃らし峯打さるゝ其の怖さ血脈正しい家に生れ
て變る枕に身を汚すの好まぬ事ゆゑ寧ろの事刀の錆と思へど只た一人の兄さんにて會バ
話も出來やうかと圖れぬ事を憑みにて死る命を存留へつ心に染ぬ苦界へ入れバ武衛の其
儘身の代を持て何首へ往たやら更に行方が知ぬといふ然ども今更詮方もなみだに沈む哀し

さそ笑顔にまぎらしうき臥の勤めも馴れバ狎馴て氣を感さむるよすがもわれと夢の間さへも忘れぬ阿兄の會たひ一応と言も畢らず泣沈めバ松藏もまた眼をまば叩き聞の聞く程不便な身の上今の話しの様子で全くと和女の匂引され此へ售きた身の上ゆゑ兄が知て一日でも苦界をさせて置れぬ仕儀よく主個に懸合て年期証文を取返すか肯ねバ公儀へ訴へて是非に足を洗はせると起んとするを外記抑止め然思やるの道理なれども今其の事を懸合なバ我が一身にも係る事ゆゑ雲時怒りを堪忍へよ予また思ふよしゆれば汝も便宜を得さすべしと鶴の一聲松藏も裝太夫も侶俱に仰せ畏まひふと異口同音よ拜承する折から茶屋が持運ぶ酒肴に外記の驚きて疾く松藏も目配せそれバ松藏心得立出て茶屋へ歸りを待受たり裝太夫の泣顔を洗ひて更に化粧をなし衣を更め座に出て歸らんとする外記を止め先づ一献と献と盃に思ひを込しと白河燒器に盛り山海の珍珠の膳部置並べて只管手厚く接待たる真情の後に顯ゆる韓紅の丹心のそよぎ始めと知られけり

第四回

不題安西伊賀介の茶道白江洗伯に外記の事を謀りしかの何とか便宜あるべしとて同僚中に

も委曲を語り早晚か前の仕返をなすべき時のあるならんと心待よ待たれバ詰所にては故障もなす只其の機會を計りけり然ども八重子を思ふ懐ひの一日も忘れず傳手を求めて只一度の會瀬を聞まはしと私かに洗伯の處に至り絆を打明し何の便のゆるまじきや渠の今も座光寺へ歸らず松平の寓居を聞たれば是非に足下が智慧をもて一夜の契を結ばしてよと一向頼むに洗伯も總かに之を承諾て我が淺慮なる智を以て出来る事なら致して見んが懸路の知導の千家にも石州流にも傳らねバ覺束なしと打興て其日の事なく別れしが外記の忠僕要介の斷ず安西本多門が舉動を探り居たりし一夜安西の下僕が文箱を持って忍び出麴町より三番町の松平諒吉が邸の高屏乗越て忍び入んとする体を早く認めて要介が無闇に其下僕を擲り付け文箱を奪ひて逃出し後に中を開き見れば伊賀介より八重子の方へ送る玉章なりければ儲こそ去年の監介兒も是れ皆伊賀が爲たる業よな然バ八重子の方様が仰も此の事なりと思ふものから聊かも是等の事を外記に語らず我が身で心を付け居たれば更に知る者なかりしかと件の下僕の主命を果さで歸る路とがら今我が物を奪ひふる男の容子を考ふるに何となく彼の要介に能く似たれば夫どの明て言れぬと何時かの心を引て見んと思ひ

量りて本多の僕も其の夜の始末を密かに告げ合題なして居りしが斯とも知ぬ要介の伴待よても心を配り口善悪なしと世の人又言るゝ下僕の事なれば今又何とどか語るべしと慮りかりの淺くして却て那の夜の事なを爪めかしたる故をもて二人の下僕の儲こそと疾くも目と目を見合せつ双方よりして木刀を抜持ちながら打て蒐るをこの何故と其の手を捻上げ動かせぬに二個の下僕の怒り猛り盗人猛々しいと世に言如く走り使の手紙まで盗む汝の根生を直して遣ん我等か信切手向とると主人の不爲だ夫とも我等を見事打かと言問も所て手を振拂ひまたも立寄り打擲するを無念と思へども是も亦伊賀一學等が吩咐て恨を返と所存ならん今一擲にぞる事の容易けれども却てまゝ主に拘る事も成ばと思ひ返して身動せず意のよあゝ打するに二個の土足は踏にじりて態ア見ろと指し笑ひ其儘打伴往りければ土足にかけた且又に主人の事をも罵られての今堪忍あり難しと素より血氣の若者ゆゑ先へ廻つて待伏るし本多よとして安西が歸る夜道もいと寒しき市ヶ谷御門の外濠にて突然下僕を取て投げ主人の恨我が怨み思ひ知よと喚りて一腰抜よと伊賀介に砍て蒐るに駭きながらも此方の劔法手練の侍士無禮者めと一聲懸け砍込む敵を右手にかゝし其儘利脇腹か

と取れば若黨輩逸やく刀の下緒とくくも高手小手は縛縛つ、挑灯照して面を見れば是松平外記が仲間要助なるに主従の面と顔とを見合せて驚くうちも莞爾と笑ひ伊賀介を睨へて要助怒の聲慄りし恨の限りを罵りつ猛狂へど不自由な身動きさへも出来ざれば阿容くとして引立られ麴町なる安西が邸の庭は繋れさり憐むべし忠僕要助主人を思ふ誠心より遂に奸者の策畧に乗られ仇の擒兒となりよける奸膽如何あるべきか案下再説伊賀介の憶す要助を生捕て外記が我が身を恨よしれ始めて知し處から猶も精しく問んと思ひて苛酷な責苦をさせながら厳しく詰れど要助の固より主人の吩咐ならず昨日兩家は仲間にて打擲されたる口惜さど豫々主人が殿中にて耻ぢめられし趣きを人傳に聞き慥に絶す恚の計ひするなれば今の一時も早く死を待より外願なしと幾回問も餘の事の絶て招丁せぬ處から伊賀介も怒に堪ず切樂んどの思ひしかど是にて外記の荒肝を取弄んも一興ならんと必利たる若黨に委細を語りて要助を縛附のまゝ駕籠に乗せ詳し事の次第を記して之を駕籠の内に入れ松平へと持せ遣しに外記の何の氣も着ねど思ひ設けぬ安西氏より到來物どの如何なる品先式壺へ運ばせよ我また親ら受取んと着流ながら一刀を横たへ立出る此時遅し彼時逸し駕籠より

出る要助と互に面を見合して駭く外記ふ愁ふる要介面目投首萎爾とさし俯向て扣ゆれば外記の何をか思ひけん衝と駈入て手束を認め是をバ安西の使に遞與し御配慮忝けなくいふと傳へ吳よと言棄て我身の飛來離と庭に下り要助汝の如何るれば主に耻辱を與へしぞ尋問ふべき仔細ありキリく歩めと細を取り奥庭先へ引据つ聲荒らかに言けるやう不忠不義なる下部要助主人の面を汚せし上の今の一命助け難し刃物の穢の望まねを予が手に懸る覺期せよど一刀閃りと抜んとする兄の氣色に驚さて花乃の咄嗟と走り出モシれ兄の様要助を貴兄の何と爲されまを細縲で邸へ歸つたどて只一朝の怒も乘じ仔細を問すお手討とい常の貴郎のお心に似合あるなされ方よし亦粗忽があるにせよ是が普代といふでいなし言ハ年期の渡り者暇をお出なさたら夫で事が治りませうマア緩りと御思案遊し御短慮を思ひ止つて下さいよしと又抜く手に取絶り詞を盡して諫むれば外記の容を正し花乃の詞の道理なをせも不便ながら要助を手討にせねば成ぬ仔細の依智に長たる伊賀介が自ら手討に成ずして細縲を送り返せし深意の渠飽までも慈仁を示し已が悪を他人に遷し我を懷て情慾を遂ん心と猜したり因て我ま渠の爲に此の要助が首級を送らば渠の心も和きて御書院番の風儀

も直らん若し然ならば要助が命の幕士の幸ひとあるべき信義の犠牲なるべし果して風儀も矯正らぬ上猶我儘に寡りなば我にも仇の安西始め連る族を斫殺し誓を復さん我存念要助命を遞與すや如何と始めて明と本心に要助厚き涙を流し差俯向て暫時の詞もなく有けるが聴ゆつて面を上げ一期半季の仲間とて忠義を知悉ハ片時でも御奉公が成ませうか主人の爲に棄る一命何しに惜いと思ひませう何卒下郎の此首をお切なされて下さりませと居直る風情に外記よりも花乃の感涙止も敢ず十戸の村にも忠信あり寔や其方の心志連れ看上た身の覺期とい言其方も四十に未だ間の在る漢の事定めし親や妻子も知らうに言置事のあるならば兄様に言すとも妾まで何かの事どもと云れて要助首を低げお情深い其お詞下郎の國の紀州和歌山幼稚時に親も別を百姓業も出来ませぬ懶惰者とて國を飛出し江戸の邸の折助奉公女房もなければ子供もない臙一本の三文奴今と成て幼少から好て習つた劍術や柔術の一手の生兵法飛た大疵を求たも悔んで見ても後の祭下郎が命で御役所の風儀が直る事ならば何ぞスツパリ御前様願ひませると首さし伸西よ向つて座を占る健氣な体に外記も亦心弛みて涙を流し恚る忠義な家來を持ち續かな事めて殺といふ我が不運の如何ぞや

許して吳よ要助と後又廻つて抜かんとする白刃の鏗音聞付て駈出る松藏此体を見て打驚き
 這の何故に要助をと絶る鎧を逆拂ひ閃りと抜くる刃の光り首の前を落にける血を拭
 ず松藏が目先み突付ヤイ松藏汝も俱に手討にする奴に何ぞ命を助け今日より暇を遣
 ぞよと思ひ悪なき主人の詞は松藏轟く胸を据モ御前様貴所様の何故罪なき要助を殺すの
 とかの私しすまで御逆放とい
 ん、知た遺恨重なる安西自
 餘をお討遊ばも御存念よ
 と言聲高しと押し止め花乃の
 彼首の隔に往父上様や母上
 の知し給ぬやうあせよ松藏
 此首へと招近付血刀拭ひて
 鞘に納め要助手討の一伍一
 什を物語し上密やかに耳に



口當私語ハ松藏頻りに打黙
 頭御暇出たる上うらの命に
 換ても此の一義を必ず遂る
 でございませうと外記が深
 慮を始めて聞し若黨松藏の
 涙を拂ひ討落されし要助の
 首を其の儘三寶に乗て帛紗
 に押袂み衣服を改め立出て
 安西方へ赴きしが松平より



返禮に來りし使者と聞よりも伊賀介の直々に對面せんと廣書院へ通せば得たりと松藏の遙
 かに彼方に座を占て待間程なく出来る伊賀介の眼下に見下し外記殿の若黨松藏と其方の
 事なるか返禮として使者の趣き大儀々々と坐を進るに松藏ハツト頭を下げ御前にも先御勇
 健にて恐悅至極に存せざる主人外記申せざるに先に御心に懸させられ何よりの御

贈與物難有く拜領せりさて何をが御返禮と存じませれど小祿の身の上あれば心に任せず
御意に入ぬか存じませれと心を籠たる御選の此の一品と御受取下さるべしと差出申す
ぞとぞら縷の裏付帛紗打覆ひし品物なるを瞥と見て如何なる品か知れども松平家の重器
なれば鬘斗を添て返せしよ今更かある御返禮を受る覺の更になし疾此品を持歸り主人に斯
と告よとて席を蹴立て立んとする袴の裾を睨と捉へ心を籠たる此の返禮中をも見ずして返
させらるゝ尊慮一切解り難し一應中を改め給へど猶も包みを差寄されば伊賀介の聲を暴げ
無禮なり若黨松藏疾々夫を持返れと扇を持て確たと打バ帛紗の落て中に是血さへ未干ぬ
要助が首を眼先へ突付たり伊賀介の思ひも懸ぬ外記が深慮に驚嘆して是のどばかり詞なけ
れば松藏然こそと打頬笑と如何是ある返禮の品を篤り辯ひしよか御無禮なしたる要助を活
し置いて道立す然れど不仁は殺さん尊意に叛く道理なれど追放せんも得了にて思ひ切た
る主人の深慮御受納下さませうや將また拙者も斯までに御無禮やせし不埒な始末若し御
聞入之なしとあらば拙者の首をも夫に添御返し程を願ひまするは前否やの返辭をど刀
を傍に引寄て身構へしたる其態形勇氣表に顯えてさも凄じく見ゆにけり得了の伊賀も我を

折て松平氏の兎も角も汝が孤忠も感激して此の一品の受納なし追て驅と一つになし我より
葬儀を請やさんまゝ外記のよは配慮も伊賀腕に領承えたり歸つて斯と通ぜよと件の首
を受納めて伊賀の彼方へ入にけり斯て松藏の館に歸れば間もなく首級を安西より送り來る
に驅を合せ牛込南寺町の多門院へ埋葬りするが是よりして營中の悪風漸次に靜りて文政も
はや三年となれり那の松藏の主人外記が思ふよしの有といひて件の一體を濟すと問もなく
身の邊を取らせしかば松藏事の心を知られぬと嫌疑を省く爲なるべしと思量りて其近所に矮
小なる屋を借り影に副て主人を護り居るが一日不圖心付きたる事ありて急ぎ吉原へ走り
行々妹装に對面して去年始めて會する折直にも松葉屋半藏に懸合する上泥水の足を洗せ
身隨にせんと言を主人に止られたるが今の主人もなき身の上我が名の外に主の名を出す事
どて有まじければ公儀に願ひて勾引しの次第を言出脱身をさせん豫て汝も其の心を睨にせ
よと言合めるも装太夫の重縁で道やう夫の嬉しい事なれば一旦思移る旦那さん未だ勤さ
へ碌々せず判所沙汰にて身脱をして何の心も濟ませんから兎に角一旦勾引しの隙を明し
た上で禮奉公の妾が寸志只是れ丈の貴所も御篤心をと欺られて夫をも否といふ時人道

の五常を濫るに似たりと思へば、纒かに點頭て兄松藏の松葉屋を立出ると其が儘公事に明るき者を使て直ちに訴へ申しさかば一應松藏を調られ其の申口明瞭るれば夫にて此方の調も濟み後にお松葉屋半藏と抱え遊女装事吉田屋喜平が娘を園を呼出されし處から装太夫の曠の場所今日ぞ其の名の装を身に着飾し襦袢の光目眩きまら砂を重ね錦の裾に更常より突ぬ兩手さへ下で命を待つうちよ吟味役聲を和げ吉田喜平の娘を園其方悪漢武兵衛の爲よ半藏が方の遊女とありし其の概略の兄松藏が願に因て分明なれど兄の幼時に別れしと云ば其方更よ緋れ基の詳さよ申立よとの公命厚く黙止もならで恐るゝ言上すれば半藏夫に相違なきや詳しく手續を申立よといと嚴かに問るゝに素より兄が願書と相違なすべき事ならぬと此方の吉田屋喜平が娘と知て抱えし者ならず武兵衛と判人が詞に因てお園こそ全く武兵衛が娘と思ひて多くの資金を遞與し上抱え遊女にまたる事ゆる兄とやらんお引渡との甚だ迷惑に候ふと言上あして云々と陳辨すれば裁判も其の目れうちには果すして猶も再び呼出さんと双方退應あしたりしが是より後の松藏と半藏とをのみ呼出され對決等も有たるに黑白決せず荏苒と月日を空く過したり

第五回

人の好悪い其而の異なる如き者なるや松平外記の装に懸惹さられし事を知り芝蘭の室に入ながらも敢て其香を袖に止す若鶴松藏に違を遣し恩誼に報ゆる便ととるお那の茶道洗泊の彼方よ知ぬ片小浪須磨の浦曲に焚く盪の我がから焦れて通ひ詰實の兄に邂逅しる情を鼻にかけ徳利口にい夫といの橋の夜の契も細かに聞ねよかしと思ひ居る折しも松葉屋半藏と装が兄松藏との間に風波さち騒ぐ奉行所沙汰に逢瀬さへ隨意になら糸バ何どかして我が僂伴のあらすやと獨り諸腕又さて圓き頂と右なり掉傾ひけても出ぬ智慧に困じ果たる其折から表に音訪人移りて密かお對面を覗ふといへり何人なるかと小室へ打通して會は是なん松葉屋の半藏あるに驚きて這い得難き珍客かなシテ何故の來臨あるぞと問ハ半藏一禮して外の事でも有ませぬが貴納も豫て御存じの装ひ太夫が事よ就き先頃よりして公事起りはや半年の餘になりて師走の月に這入しかと未だ落着なきに因り私し方でも家業に負け從來多くの客を取り問夫や浮氣の名も立す堅く勤めた太夫に免じ年期の巻て遣ますが今角町へ移轉て未だ問もなきに至盛を失ひましてハ暖簾も響く事ゆる何卒して禮奉公を三年丈と

て呉るやう貴納様から御示談と御運なされて下さるまいか御懇意筋に甘へまして願うする
此一事と言つ、目錄取出すを警と見違つ、其儀でござらば最易し此洗伯が受合上の御心
易く思ひ入れよと猶も細精語らひて其日の互に別れけり斯て洗伯のゆくりなくも半藏に頼を
亨て肚裏に歡ぶ事一方なら糸を那の装が兄といふの松平の若黨にて松藏といふ堅氣を男
何して渠を説付んと種々に思案を廻しつ馳て牛込築地町の松平家へ到りて見に渠些少仔細
有りて疾又遠を遣ひしうりと聞て白江の失態あせしが如何ともして面會なさず事便り
悪かりと思ひ直し往來にも心を配り居りし折圖らず淺草觀音の奥山にて見懸たれば慌忙
呼止め松藏大哥何處へ行くお前に會うと此の日頃苦勞をしたる此の洗伯鳥渡話しかまたい
から私が馴染の菊本まで無理に茶店よ伴ひてさて松藏外でもなぬがお前の妹の装太夫
の判所沙汰に成て居ると聞た時より悪い事だと思つたるれと止られもせず今日まで黙言て
居る處何やら斯やら長判所で半年足すに成て見れば何も黙言て居られぬが此の貴様が此
の頭に発じて年期の二十六と二十二にして願下げをする譯に往まいかと入る世話の差
出口松藏勃といまされをも態と素知ね体にして旦那の仰やる事だからと承知がまたい

けれども先頃からして松葉屋の申口が氣に入ね其の相談に乘せんと判然言れて洗伯
頭を撫ながら貴様の詞の道理至極で此の圓頂も而目次第のない譯だがいと年をして彼れ示
談の運べなんだと言れもせねば長い短いを言あい何だ是で往まいかと那の半藏が詞の
通りを語つて只管頼むのを是さへ無譯にも謝絶のね夫で一應お園にも相談をして御返答
致しませうと立別れ直地お園の装お洗伯示談の仔細を語れば因より最初から年期が抜
れば禮奉公をさる氣で居たる装是で兄の趣意も立ち我が身の義理も届く事ゆゑ異議なく
話し纏りしに文政三年十二月十八日此の公事願ひ下に成りたれば兄松藏も安堵して年期
の耻文さへなけれは何時でも妹の引取れると心の歡び如何ならん夫に引かへ装が再び見
世へ出たるゆゑ今多くの金もなくとも身請の出来る事ならんと内々松葉屋半藏お容子と
聞バ客の身請となる時の祝儀と茶屋の渡にて大凡三百兩ならでん結句廓へ出せませうとい併
し貴納の身請とならば取替と双方で六百兩に負ませうが若し他人でん全盛丈輕くも千兩頂
とまると聞て白江困じ果五十か百の金ならん仲間の者を購着ても亦詮術のあらんかなれと
六百兩といふ金いと吐胸を突て思慮すれども更に其の術ゆらざりしが元此の表坊主といふ

諸大名に詣ひて幫問めらるる事をなし多くの金を貰ひ受貧苦を知らず城中で諸侯登城の折節に我を愛する大名にの残る限なく案内をなした金銭を與へぬ者にの不知案内の營中を幸ひとして耻辱を與へ尾を其の身の勤めとそれバ威權に誇る大小名も先づ同朋に賂賄て身の安穩を計るが如き惡風なれば隨つて圓顯の富貴盛んなりしに白江平素淫酒に耽り出入の諸侯も見返ぬ同朋中の札附なきバ人の富貴を妬ひの之家に餘財なきが上裝太夫が身請の事を思ひ立ての彌が上に彌増し金の欲さま同朋中にも有福の聞の高き川上理順を教唆して吾が得手たる賭博の筵を開さしが固より無頼の圓顯輩一個加のり二個入り遂に二十四五人の人数となりて今日何首明日の彼方と寄集ひ賽どかいへる物を持って一六勝負の標浦狐四季折々の花合せ賭碁の聲を徐々焉し何箇擲ひが速るべしと明ても暮ても此の事に力を竭す袁珍道人白江も未だ是といふ勝利を得ねバ那の一儀を行ふべくもあらぬより尙も同僚を煽動て文政四年三月三日上巳の節句御儀式を幸ひとして帝鑑の間の床下へ場を儲け其の日の賞ひを題となし一大勝負を爲たるに勝利を得て一時に富貴を極めざるが之を反して川上理順の思ひも懸ぬ負を取りさしも富貴は誇たる身も今の洗白は多くは負債出來るを

如何にゐしての償いんど種々苦心をなし居るも固是れ陶朱が富にして浮雲も均しき者なれば今將何と餘方もあまぢひよ那の金を一時證書の借となしたるよりして利み利を重ね暫促るゝのが苦しさ不圖愚計を案じ出し一日御前へ伺候の折密に御佩刀を盗取しが持出さん總ある故更に備前長船の刺鐵の短刀を窃盗出して持歸り見れば葵の金目貫椽に頭に小尻より追刃々脛の絡止まで皆金銀を用ゐたれば川上大さよ歡びて人ある折を窺ひ居間に掲たる額面の裏へ隠し置たるを知る人あらじと思ひしが誰か後に窺ひて緯の様子を見極めし現隱顯の額の文字其身の上みぞと知ぬ圓顯ぞ愚かなる宮お奏る神諫め遠音に響く音楽も更ての聲も夏の夜の月も雲間に入がてに高敷續きし吹上の御門を纒かに離れふる膳木の松を足溜り表の方よさし出たる枝を傳ひて濠外へ飛來離と下たる一個の曲者手拭問深に打被れば面ひ定かに見分給と蟬の羽どかいふ薄羽織に小刀腰に横たへて袂包をを抱えたるが右の脇へと持直し代官町を北東へ行んとする折向ふより供人夥多打連て此方よ來かゝる一個の婦人怪の者よと見咎めて下僕がさし出す提灯に袖を挿して光を避隙を見合せハツサリと打落したる腕の湯是いと驚く野子玉の黒白さ闇を幸ひお往んとする

を件の婦人行方の方に立塞がれば二足三足踏退き思はず後邊に來懸りし武士に碯と突當り取落したる件の包取んと寄るを然りさせじと其手を拂ふ件の武士一個ならず二個にまて途を掠めて挑み合騒ぎに婦人も立去れず隣足元何物の雪踏に隙を拾ひ取り若黨下男を呼かけて半藏御門を出行たる後に二個が手探りに争ふ折しも吹上にて賊よくと叫び侍衛の殿原組子を順へ此方をさして駈向ふに以前の曲者早くも認め支ふる武士を突退て堤の上に登ると見しか水音高く飛込たり不意の騒ぎに驚く武士を取圍みたる捕手の面々手向致すな御誑ごと呼懸く駈寄て高手小手に撈め捕り元來し道へぞ拘引歸りぬ开も被捕人の何者ぞ是松平の忠信たる普代の若黨松藏なりけり爾る程に白江洗伯己が目算圖に當りて



同朋中の富豪と聞えし甲乙さへも白江に三舍を避るばかりされば今の装の身請をなさんとも容易きことにあるされども爰に一つの障礙出來ぬ开を何と尋ぬるに固白江洗泊の妻といへるの同僚の司馬何某より貰ひ受け縁故の深きものなりしが恠る奸邪の茶道に添女房に似もやらで貞心深きも



のなりしかば良夫が不義の富貴を貪り不正の貸金を川上に厳しく督促を属よからず思ふに附て折又觸事に擬へて意見をとれど白江の之を肯入す理順を我家へ喚寄て聴も蒼蠅を嚴談

の數回なるに女房の有すもがなと案じ詫び遂に病ひの枕も着き文政四年七月廿日良夫の事を盲死に還らぬ旅路の客とぞなりぬる如何強慾貪婪の洗伯ありとて借老の誓を立たる妻に別れ反つて之を喜ばんや鬼の目に持つ一滴の涙とくも野邊の送りも七七日の訪吊ひ忌服も掟の如くに受れば兎角するうち日も立て秋も中浣を過にけり
昔語千代田の刃傷前編終

明治十六年六月十日出版御届
同年同月十日出版

定價十三錢

編輯兼出版人 東京府平民 里村吉藏
芝區金杉川口町二十番地
松江堂
神田區一ツ橋通

大賣 日本橋通り三丁目 丸屋鉄次郎
横山町貳丁目 辻岡屋文助
小挽町一丁目 萬字堂
裏神保町 鶴聲社
通り四丁目四番地 金櫻堂
神田雉子町 巖々堂

